

第13回日本余暇学会研究大会 9月26日(土) 東洋大学にて 観光関係諸学会との共同開催!

日本余暇学会ニュース

発行所 日本余暇学会 発行人 藪田碩哉 発行日 平成二十一年七月二十一日

第13回日本余暇学会研究大会は、昨年10月に観光庁が設置されるなど関心が高まる観光に注目し、「余暇と観光」をテーマに掲げ開催します。そこで国内の観光関係諸学会共同大会と同時に開催し、観光研究者との交流を図りたいと考えています。これまでもさまざまな団体とコラボレーションを行ってきた日本余暇学会ですが、今年度の大会においても、余暇と観光の相互の学会に大きな相乗効果を期待しています。観光関係諸学会共同大会との同時開催のため、東洋大学(白山第二キャンパス)が会場となります。また、会場校の都合で一日(9月26日土曜日)のプログラムとなります(ご了承ください)。

さて大会のプログラムは、『体験交流型ツアーリズムの手法 地域資源を活かす着地型観光』の著者としても知られ、観光まちづくりの最前線で活躍しておられる大社充氏をお招きして講演をいただきます。全国各地におけるさまざまな実践経験をもとにした興味深いお話が期待されます。また会員の皆様による研究発表につきましても、例年通り「テーマ発表」「自由発表」の時間を確保しております。会員の皆様の積極的なご応募に期待しております。

第13回 日本余暇学会大会日程

9時30分	受付開始
10時15分	日本余暇学会研究大会開会挨拶
10時30分	日本余暇学会研究発表1
11時30分	昼食
12時30分	日本余暇学会

日本余暇学会研究大会テーマ

「余暇と観光」

基調講演に大社充氏
(NPO法人グローバルキャンパス理事長)

日本余暇学会事務局
〒191-0016 日野市神明1-13-1
実践女子短期大学 生活福祉学科藪田研究室
Tel/FAX 042-584-5428
e-mail info@yokagakkai.jp
Home Page http://www.yokagakkai.jp/

会研究発表2 13時45分 基調講演 大社充氏(NPO法人グローバルキャンパス理事長・次面に「着地型観光」による観光まちづくりの次世代ツアーリズムの推進とライフスタイルイノベーション) 15時30分 日本余暇学会総会

※ここまで時間帯は、日本余暇学会単独プログラムです。別室にて、他学会の研究発表等を予定しております。聴講は自由です。これ以降は、観光・余暇関係諸学会共同プログラムです。

16時30分 観光・余暇関係諸学会共同シンポジウム

「観光・余暇研究の現在・未来」

シンポジスト・藪田碩哉(日本余暇学会会長・井上博文(ツアーリズム学会会長・香川眞日本国際観光学芸会会長・山上徹(日本ホスピタリティマネジメント学会

会長(予定)・安島博幸(日本観光研究学会会長(予定) コーディネーター 松園俊志(東洋大学教授) 18時 観光・余暇関係諸学会合同懇親会

【研究大会参加申込】参加費・会員二千円。非会員三千円。学生千円。

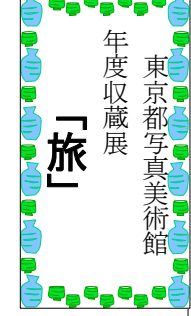
懇親会費・二千五百円。*参加費は、当日受付にて集金いたします。

【研究発表申込】大会での研究発表を募集しております。発表は一人15分質疑応答5分とします。

○研究発表エントリー締切 7月31日

○レジュメ(発表者は全員提出してください) 8月31日

*「観光・余暇関係諸学会共同大会」開催にあたり、5学会共同で日本余暇学会研究紀要とは別に「観光・余暇関係諸学会共同大会論集」を発行します。(下島康史)



『余暇学研究』第13号 エントリー締め切り迫る!

■投稿希望者は、事前に学会事務局までエントリーしてください。

- ・エントリー締切: 7月31日(金)
- ・エントリー方法: 氏名、所属、住所、電話(FAX)

電子メールアドレス、原稿の種類(論文、研究ノート、その他)、タイトルを記し、下記の学会事務局宛に電子メールを送信する。郵送、FAXは受け付けない。

*エントリーされた会員には、投稿規定、執筆要領(執筆見本付)を送付します。

■原稿締切 平成21年9月30日(水) 発行は平成22年3月末予定。

◎エントリー先: 日本余暇学会事務局 Email: info@yokagakkai.jp

詳しくは「日本余暇学会ニュース第66号」を参照

「オリエント調査」、また「オリエント世界へ」として制作された「横濱写真」などが展示された。第一部に展示されたのは、「異郷」の写真であり、自らと異なる世界の珍しい景色や風俗など「非日常世界」ととらえた写真である。撮られる対象の拡大を見てみると「西欧」の人々にとつての「周縁」の拡大を見ることが出来る。というのも彼らの撮影対象は、初めはイタリアのローマ遺跡、スペインのイスラム建築、ギリシアの遺跡など、南欧・地中海世界であり、次にエジプト・オリエント世界へと拡大していくのだ。写真家の興味は大西洋を挟んだ「西洋」のアメリカではなく、インドシナを経て、大陸の東端、清朝末期の中国に至り、ついに「開国直後」の日本に至る。「東方へ」と題されたこの写真展の意味するものは、単なる地理的な拡大ではなく、E・サイードが指摘したように「西ヨーロッパが、自らの内部としてもたない『異質な本質』とみなしてきた『オリエント』イメージの投影し、心理的な距離感を拡大・強化するものであった。特に「横濱版」の鎌倉大仏に数名の日本人が登っている写真は奇異であった。「おそらく大仏の大きさを表現したと思われる」。われわれの常識から言えば考えられないような光景が、いかにも日本的という彼らのイメージの投影によって作られている。他にも明らかに演出された力士、芸者、フジヤマなどの写真も見られた。それまで、

せいぜい旅行記やイラストによって、想像することしか出来なかった「異質」な社会のイメージに、写真というイメージの「基準」が出来たことによって、「同じもの」を見るのが旅の目的になっていったのだらう。だが、今日がわれわれの経験する多くの旅も「未知との遭遇」ではなく、実は事前に様々な情報によって形成された、場所に関する自己イメージの確認作業になつていないだろうか。

その考えを強固にしたのは、七月十八日から始まった「旅 第二部・異郷へ」写真家たちのセンチメンタルジャーニーを見てからである。この展示は高度経済成長から安定成長期に移行した、一九七〇〜八〇年代に発表された写真を中心に「日本を発見し、自分自身を再発見する」(旧国鉄「デイスカパー」パンキヤンペーン)のコンセプトによる展示がなされる。内藤正敏、秋山亮二、土田ヒロミ、荒木経惟、森山大道など、いわゆる「旅行写真家」ではない写真家がほとんどだ。彼らの写真には

「観光名所」はほとんど登場せず、むしろその道中に見かけるような景色、人々、生活風景が並ぶ。だが「個人旅行」では、旅行のウェイトはほとんどが、計画、準備そして移動、食事、睡眠であり、「名所」にたどり着くまでは、見知らぬ人々の「日常」の軒先を借りなければならず、純粹な「非日常」としての旅行は存在しない。つまり今日のようにな組織化された「消費」によるツアーでは見られなくなった、旅行中の光景がここに展示されている。例えば、森山大道の「函館」には、函館山からみた雲に覆われた函館夜景が含まれていた。おそらく多くの人が描く函館夜景のイメージは、「百万ドル夜景」にふさわしいものだろうが、実際にほとんどの人が見た景色は、森山の写真に近いものだったのではない。

第一部と第二部を比較すると、第一部は写真技術の発達やツアーの拡大による「消費する旅行」の歴史を顕在化し、第二部は消費する旅行によって覆い隠された旅行の本質を「脱構築」

会費納入のお願い
平成21年度会費の納入をよろしく願います。

口座番号: 00140-9-729065
加入者名: 日本余暇学会
会費: 一般会員10,000円 学生会員5,000円
*新しい学会バラストができました。
余暇に関心のある方に入会をお勧めください。

「パンフレットと違う」、「予定と違う」、「求めていたものと違う」など、自らの想像力の貧困さを棚に上げる、消費社会にとどまり浸かった旅行者にとつて、この第二部は狐につままれた印象しか残らないだろう。この展示会では写真が発明された19世紀から今日に至るまでの、様々な旅行写真を見る事が出来る。また、旅行と写真の関係性から、ツアーリズムとは何かを考える一助となる。第三部「異郷へ」が待ち遠しい。

「山田貴史」

今年の研究大会は「余暇と観光」がテーマである。大会を前に「観光立国ニッポンの現状と課題」について考えてみたい。観光庁は「訪日外国人旅行者一千万人」「日本人海外旅行者二千万人」「観光旅行消費額三十兆円」ほか数値目標を掲げ、観光立国に向けた施策を強化している。観光需要の拡大が特に強調されているが、同時に、その受け皿となる魅力ある観光地づくりや人材の育成等も推進している。そもそも観光立国とは何を意味するのであるのか。それは小泉元総理が観光立国を提唱する前にまとめられた観光立国懇談会報告書にみる事ができる。それによると「観光立国の基本理念は、住む人々が地域の『光』をよりよく自覚し、訪れる人々にとっても地域の『光』をよりよく感じさせる『住んでよし、訪れてよしの国づくり』

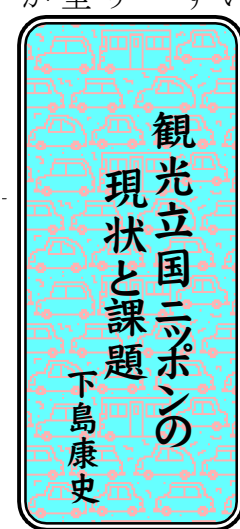
を実現することにある。」としていて。訪日外国人の増加策等の「訪れてよし」につながる観光施策が目立ってしまいが、基本理念のもう一つの柱である「住んでよし」につながる魅力ある観光地づくりや人材の育成も、観光立国にとって同様に重要な施策なのである。魅力ある観光地づくりについて言及するならば、やはり「着地型観光」が近年のキーワードである。従来型の観光は、出発地（発地）の旅行会社が素材（見学や宿泊等の施設を仕入れ造成した定番コースを巡るような団体の旅行が典型であったが、近年では旅行目的の地（着地）をベースとして、着地の地元住民がユニークな観光資源（体験や交流含む）を自ら発掘し旅行商品化し、個人やグループ等

の旅行者がそれらに参加するといった新たな形態、すなわち着地型観光が台頭してきた。着地型観光という新たな旅行ニーズへの対応は、「訪れてよし」に合致する重要な取組みである。さらに着地型観光は「住んでよし」の点からも大変注目されている。着地型観光は、着

の新たなツールと言いつても、観光への取組みは、すなわち住民の余暇開発の新たなツールと言いつても、換えることができるだろう。観光立国を目指す現在のニッポンについていえば、必ずしも光の部分ばかりではない。余暇研究の視点から批判するならば、やはり休暇問題を検討しなければならぬだろう。官民が連携した形での休暇取得の仕組みづくりが不可欠である。さらに昨今では景気の低迷からくる賃金の減少を補うために、サラリーマンの間でも「ダブルワーク」と呼ばれる現象が広がりをみせているという。真の観光立国に向けた余暇拡大に逆行する現象である。着地型観光という言葉が用いられるようになって久しい。その間、全国各地で着地型観光

佐藤生実
倉品康夫(早稲田大学)

プロジェクトが推進され、多様な成功事例が報告されてきた。しかしながらその一方で、いわゆる「着地型観光ブーム」のさまざまな影の指摘もきこえてくる。前述した休暇問題ともあわせ、「余暇と観光」をテーマとする今回の研究大会において、真の観光立国につながる活発な議論が展開されることを期待したい。
(下島康史)



地は自治体・住民・NPO・企業等が連携して、場合によっては老若男女が参加して、地元の資源発掘・ストーリーやルート作り・ボランティアガイドの養成実践に取り組むことになる。こうした活動は、結果として活力ある地域づくりにつながっていくことになる。われわれ余暇研究の視点からみるならば、着地型

のプロジェクトが推進され、多様な成功事例が報告されてきた。しかしながらその一方で、いわゆる「着地型観光ブーム」のさまざまな影の指摘もきこえてくる。前述した休暇問題ともあわせ、「余暇と観光」をテーマとする今回の研究大会において、真の観光立国につながる活発な議論が展開されることを期待したい。
(下島康史)

著書紹介
海外旅行は好調だが国内旅行は低迷している。名所旧跡と温泉と変わり映えのしない料理・・・というような紋切り型の旅は飽きられている。それに代わって地域の個性を生かし、その魅力を引き出す「着地型」の旅の開発が大きな課題になってきた。著者は京大農学部在学中、アメフトの選手として活躍、松下政経塾での研鑽後「エルダーホステル協会」の創設に参画し、旅と地域づくりをテーマに実践活動を進めるという幅広い経歴の持ち主である。この本には著者の関わった多彩な旅のプログラムを紹介しつつ地域資源の活用策を整理している。何と言っても最大のポイントは「人」の結びつけ方にあることがわかる。[蘭田碩哉]
(大社充先生の講演を、9月の第13回研究大会で予定しています。お聞き逃し無く！)

著書紹介
クリス・ロジエック著
渡辺潤/佐藤生実訳
『カルチュラル・スタディーズを学ぶ人のために』
(世界思想社、二〇〇九)

昨年度の研究大会では、「カルチュラル・スタディーズとしての余暇論」というテーマが掲げられ、余暇研究とカルチュラル・スタディーズ(以下CS)の接点をさぐる一歩が踏み出されました。また、本年度立ち上がった「余暇学再編プロジェクト」では、引き続きCSと余暇研究を結び取り組みが行われています。本書は、余暇研究とCSの接点を考えるうえで有用な手がかりを提供しています。というのも著者のクリス・ロジエックは、これまでに余暇に関する本を何冊も出版している余暇の研究で、本書でも余暇に関する事例を数々あげながら、CSの40年の歩みと現在、そして未来を論じているからです。

イギリス発祥のCSは、「身近な文化は、常に政治と神話に結びついている」という視点にたつて文化を研究する学問です。日本では90年代初頭に華々しく紹介されましたが、一時のブームに終わってしまつた感があります。その要因の一つに、研究対象の文化を、自分から離れたものとして扱う傾向にあったという点があげられると思います。しかしCSは、レイモンド・ウィリアムズが唱えた「文化は日常である」という命題を基本的な姿勢として40年以上研究を続けてきました。文化とは、ブルジョワジーのそれに限定されるものではなく、誰もが生きる場であること。どこにいても何をしようと、常に私の周りには文化は、常に政治や神話に結びつけられている。このよう



な、誰しもが生きる日常への問いの重要さを、本書は改めて考えさせます。ロジエックは問います、「なぜリアリティTV(どつきりカメラ)に夢中になるのか」「あるCMに好感を持って、商品を買ってしまうのはなぜか」「なぜある人はAを選び、別のものはBを選

す。コンサート会場や、スポーツクラブ、カルチャーセンター、居酒屋といった場所だけに余暇があるわけではありません。ウィリアムズの命題を文字れば「余暇とは日常」です。部屋でダラダラする、お茶を飲む、あるいは電車での通勤も余暇に含まれるかもしれません。ゲームをし、携帯電話をかけ、漫画を読み、化粧をし、ケンカをし、痴漢をする。同じ空間で、多くの人がどがそれぞれの余暇を過ごす通勤電車は、さまざま人びとの余暇が共存し、ときにはぶつかり合うユニークな日本の余暇空間であるといえるかもしれません。本書が身近な余暇を改めて考えるきっかけとなり、日本におけるCSと余暇研究双方の活性化になれば幸いです。また本書は日本におけるロジエックの初翻訳ですが、今後ロジエックの余暇研究が日本語で読めるようになることも願っています。
(佐藤生実)

「余暇学再編プロジェクト」からののお知らせ
これまで日本でおこなわれてきた余暇研究は、どちらかと言えば、実用的な「余暇善用」という考え方が主流でした。もちろん、こうしたアプローチは余暇研究の有益な方法論のひとつですが、それだけでは余暇の全体像が見えてきません。欧米では、「レジャー・スタディーズ」という呼称で余暇研究がおこなわれていますが、その方法論は多種多様で、学際的な研究が活発に展開され、実用的な側面から学術的な側面にいたるまで、幅広いテーマが議論されています。それは、カルチュラル・スタディーズやポピュラー文化研究と同様のアプローチとしてとらえることができます。本プロジェクトでは、こうした欧米の「レジャー・スタディーズ」の概念を踏まえ、その方法論を今後の余暇研究に活用するために、毎月1回のミーティングで輪読やディスカッションをおこなっています。そして、学会監修の書籍出版やカンファレンスでのパネル発表などをおして、新たな「余暇学」の方向を提示していこうと考えています。本プロジェクトにご関心のある方はぜひ一度、ミーティングにご参加ください。
*プロジェクトで使用している文献
クリス・ロジエック著/渡辺潤、佐藤生実訳
『カルチュラル・スタディーズを学ぶ人のために』
世界思想社
*余暇学再編プロジェクト第4回ミーティング
・日時：2009年7月25日(土) 10:00~12:00
・場所：桜美林大学四谷キャンパス 301教室
*本プロジェクトに関する問い合わせ先
kyohei_miyairi@mac.com (宮入恭平)